XPLANE TIMES

NEWSLETTER Vol.4
2024 | July

院留学の本棚

『フランス留学への道
―学び、文化そして新しい発見』

長澤拓海さん（Université Grenoble Alpes）

『複数の国での大学院進学と研究
―ロンドン・シンガポール・ケンブリッジ』

上砂考廣さん（University of Cambridge）

特別企画

『XPLANE SoP執筆支援プログラム座談会』

昨年度参加者の留学志望者とメンターにインタビュー

大学院留学生アンケート

『ギャップタームの過ごし方』

Leuven, Belgium

院留学の本棚 #6

フランス留学への道 – 学び、文化そして新しい発見 –

長澤 拓海さん （Université Grenoble Alpes 博士課程）

珍しい留学先や研究分野で大学院留学をされている日本人の方にスポットを当て、あまり世の中に出回っていない大学院留学に関する情報を発信する連載企画『院留学の本棚』のコーナー。第 6 回の今回は、グルノーブル・アルプ大学の博士課程で物理学を専攻されている長澤さんに、フランスでの大学院生活についてご寄稿いただきました。

留学というとやはりアメリカやイギリスなどが主流かと思います。フランスにも交換留学を含め、日本人を見かけることはありますが、その大半はパリが中心となっています。私のようにフランスの地方で博士課程を行っているものは珍しいとの旨、今回このような記事を書く機会をいただきました。読んでくださる方にとって少しでも参考となれば幸いです。

■ フランス留学の経緯

日本では化学実験の視座から宇宙空間に存在する物質の生成過程を明らかにする、宇宙化学と呼ばれる学際的な研究を行っていました。しかし研究を進めていく中で、私自身の興味が徐々に理論的な方向へ向かい、現在は不規則系の統計力学について研究をしています。

当時分野を変える方向で博士進学を検討していく中で、特に日本である必要もないと思いたち、博士留学にも目を向けるようになりました。はじめは例にもれず、地の利もあってアメリカを中心に進学先を検討していました。しかしながら希望に沿った研究室を見つけることができず、そこで選択肢をヨーロッパへ広げる事としました。ヨーロッパ殊にフランスは、私が研究したいと思っていた非平衡系の統計力学やソフトマターの分野において歴史的にもあまたの高名な研究者を輩出してきました。特にソフトマターの名付け親でありノーベル賞受賞者でもある Pierre-Gilles de Genne は物理界隈で有名でしょうか。こうした伝統ある国で研究を行うことに魅力を感じフランス博士留学の門戸を叩くこととなりました。そして気づけば、フランスは南東のオーヴェルニュ＝ローヌ＝アルプ (Auvergne-Rhône-Alpes) 、グルノーブルという田舎町にあるグルノーブル・アルプ大学で博士課程をしています。

グルノーブルは小さい町ではありますが、科学都市として有名で日本のつくば市のような街です（実際につくば市とグルノーブルは姉妹都市として協定を結んでおり、つくば市長が来たこともあるようです）。また大型加速器もあり、ヨーロッパ各国の研究者がマシンタイムを予約して、利用しに来ているようです。こうした町の土壌故か、石を投げたら高確率で研究者ないしはエンジニアに当たるといわれています。

グルノーブルのバスティーユ付近の写真。グルノーブルの文字が見えます。

■ 博士課程出願の詳細

一般的に博士課程へ応募する場合は、研究者のホームページ等に記載されている求人 (open position) への応募、ないしはメーリングリスト、ヨーロッパの博士求人サイトに上がっている求人への応募のどちらかから始まることがほとんどだと思います。私の場合は前者でした。分野を移ることを考え始めてから、その研究分野の論文を日々チェックしていたため、出願前にどの研究者の下で研究を行いたいかおおよその目星をつけていました。私の場合指導教員として希望していた方に個人的に連絡を取り、その方の下で博士課程を行う許可を得たのち、**博士課程中の給与を獲得するためコンクールと呼ばれる選考を受けました。**コンクールは大きく、書類選考とインタビューから構成されています。書類選考では学士・修士の成績や研究計画書・エッセイなどを準備します。そして書類選考をとおると、いよいよインタビューに移ります。インタビューの内容は、一般にはまちまちだと思うのですが私の場合は、博士で行いたい研究分野に関連した口頭試問と修士までの研究内容の発表を行いました。コンクール前に提出した書類群には、

コンクールでのインタビュー評価を記入する箇所があったため、インタビューの上位から順に合否が出ていたのだと思います。当時、まだ日本にいたためオンラインでの実施となりましたが一般には現地対面での実施が基本のようです。

橋からみたグルノーブルの街並み

■ フランスってこんな国

良くも悪くも大変大雑把な国です。事務手続きが異様に遅いというのは有名な話でしょうか。例にもれず私も在住許可のカード申請においておよそ半年待たされ、フランス事務の洗礼を受けました。ただ面白いことに知り合いの何人かと話していると、この大雑把さを“自由度”として捉えている節があるらしく、自由にできるから良いと好意的に捉えているようです。時間に対してきっちりとしている日本の“常識”からすると、「これが果たして自由と同義なのか…」と思ってしまいますがお国柄、文化の違い、という点に集約されるのかもしれません。またフランスでは「そんなまさか!?」と思うような珍事件に巻き込まれることもままあり、良い意味で精神力を鍛えられています。とはいえこんな風に話せるようになったのも、渡仏後およそ4か月の月日を重ねた頃のこと。実際渡仏当初は日本の当たり前の“感覚”が抜けず、やきもきすることも多かったです…。ですが生活の基盤ができてくるにつれ、余裕が生まれたからか不思議とフランスという国の共有する感覚に慣れてきました。

こんなことを書くと悪い点しかないように見えますが、もちろん良い点もたくさんあります。**特に実感するのは“多様性”と“人の良さ”**です。現在所属している研究所には、実に様々な国籍の人がいます。当然フランス人が主流ではありますが、同僚はドイツ、イタリア、スペイン、ノルウェー、アメリカ、イギリス、インド、トルコ、ロシア、中国、韓国、アルゼンチン、カメルーン出身と多種多様。こういう人種の多様さはなかなか日本の研究室では見受けられません。私はこういう多様性のある環境に身を置くことが好きだったので、今の環境を非常に気に入っています。また些細なことかもしれませんが、入店する際や退店する際に笑顔で挨拶をしあうこと、ふとした際に人と目が合って笑顔になるというのは凄く良いことだなと感じます。日本のおもてなしや丁寧さとも違った何か人のぬくもりを感じ、フランスという国の懐の深さを実感します。良く聞く田舎の人は優しく、パリジャンは冷たいという話は、私個人としてはあまり感じていません。総じてみんな優しいように思います。

■ フランス田舎暮らし

なんといっても迫力満点の大自然。グルノーブルは町全体が山で囲われており、朝起きて窓を開けた際に見える大迫力の山々を見ると、ヨーロッパの原風景を見ているようでうっとりとしてしまいます。何度も写真を撮るのですが、写真には体感している迫力まではなかなか映らず、残念です。日本でも豊かな自然はたくさん見つけられますが、湿度に起因した風土の違いを感じます。

本記事では田舎と記していますが基本、生活で困ることはありません。アジアンスーパーマーケットも複数店あり、日本のお米や食材も簡単に手に入れることができます。ただし、値段は“気軽に”とは言いづらく…。例えば、新潟産のお米2 kgがおおよそ20 EURです。1 EUR = 169 JPYくらいの為替を想定すると大体3400円しないくらいの金額です。品種にもよりますが、日本では大体5 kgで同じ金額帯になるため、やはり高いと言わざるを得ません。近くにはIKEAなどもあり、基本的な食器や家具など日用品が別途必要になれば、すぐに買うことができます。

あと面白い点で言うと、グルノーブルには多数のコミックショップが点在しています。ポケモンやNARUTO、One Pieceなど有名どころの漫画はもちろんのこと、呪術廻戦など比較的最新の漫画まで豊富な品揃えです。フィギアなども販売されています。フランスは漫画大国でもあり、私自身、漫画を通して交流が始まった人もいます。こういうところで日本の漫画が非常に影響力を持っていることを実感します。

グルノーブルにあるコミックショップのショーウィンドウ

また、交通面でも丁度良い場所に位置しています。LyonとGenevaまではTGVで1時間、Parisまでは3時間程度で着くため、週末に観光込みで移動することも可能です。

■ フランス語

非英語圏の留学に際し、大きな壁となりうるのが言語かと思います。殊にここフランスに限っては、ほかの国に比べ言語の問題に頭を悩ませることが多いかと思います。

まず今の若者はかなりの割合で英語を話すことができます。そしてみんな非常に上手いです。今の世代は小さいころから英語圏の映画や音楽に親しんでいることが大きいようです。また短期でイギリスへ行き、英語を勉強しに行くことも珍しくないようです。ですが、年齢層が上がっていくにつれて英語を話せる人の割合は減っていきます。話せたとしてもフランス語訛りの強い英語を話される方が多い印象です。また使用される英語の語彙もフランス語の影響もあってかフォーマルなものが多く、意味を把握するのに時間がかかったこともありました。

普段の研究室生活では基本、英語で会話をしています。ですが、事務仕事などでメールを送る際、英語で送るとすべてフランス語で返事が返ってくることもたまにあります。毎日のメールも英仏双方で書かれたものと、フランス語のみのもの半々程度で届きます。故に完全に英語で事足りるか、というと一概にはそうとはいえません。またフランス人は気分屋のところがあるのか、友人と大学事務室に行った折節、友人は英語で対応され私はフランス語で対応されるということもありました。

日常生活では、基本フランス語です。当たり前といえば、当たり前の話ですがここフランス共和国の公用語はフランス語なので、彼らにとって英語を話すべきいわれはありません。

そのため、基本 ” 郷に入っては郷に従え ” の心構えが大切だと思います。実際フランス語を話せるようになると急に親切になったり、対応が良くなることは良くあります。言語を通した異文化理解のため、生活を円満にする潤滑油としても、最低限のフランス語を勉強しておくと良いと思います。

■ 博士での留学という選択肢

海外留学というのは必須でしょうか？ XPLANE に記事を寄稿していながら、私自身は必須のものだと思いません。日本の研究環境は、少なくとも私にとっては今と遜色なく素晴らしいものでした。海外で生活基盤を一から構築するというのは、想像以上に大変です。日本であれば、そんな苦労は最小限で済むでしょう。そしてご飯は美味しいし、食材から日用品まで品ぞろえも豊富、衛生面でも非常に優れています。

ではなぜ、留学をしたのか。**私の場合は研究分野の兼ね合いもあり、より多くの交流の機会を望み、留学することを決めました**。そして現在、フランス全土で知り合いが増えたのはもちろんのこと、ゆく先々での交流も広がり充実した生活を送ることができています。では留学をして良かった点は何か、自分自身に問うてみると大きく 2 点あります。

1つ目はこの先、どこへ行っても生きていけるだろうという自信が得られたことです。フランスへ来る前も、根拠のない自信はありましたが自分自身で生活基盤を一から作っていく中で、その根拠が得られたように思います。

2つ目は、私自身の価値観の相対化と異文化理解が深まったことです。本を読んだ際に良く見かける「文化」という言葉は一体どういう意味でしょうか。広辞苑を引いてみると、「人間が自然に手を加えて形成してきた物と心の両面の成果」、「西洋では、人間の精神的生活に関わるものを文化と呼ぶ」とあります。端的明瞭、概念的でもあります。でもここでいう「物と心の両面の成果」、「精神生活」とは何ぞや、と問われたとき答えに窮してしまいます。そう、「文化」という言葉を何回書いても、何回読んでみてもそれ以上の意味がわからないのです。ですが、案外普段のふとした瞬間の違いや違和感が、こういう抽象的な言葉の一端を気づかせてくれることがあります。私はここフランスで生活をしていく中で、思念的な言葉で理解してきたものが経験と実感によって解体され、私の「言葉」として再構築されていく瞬間がありました。これは日本にいる時には気づくことのできなかったことであり、まさしく百聞は一見に如かず、と感じます。

■ 終わりに

主流なアメリカやイギリスとは違った、ヨーロッパの特に田舎の地域での博士課程の様子が少しでも伝われば幸いです。そして、これからフランスへ留学をしようとする方の参考となれば望外の喜びです。

院留学の本棚 #7

複数の国での大学院進学と研究
—ロンドン、シンガポール、ケンブリッジ

上砂 考廣さん（ケンブリッジ大学開発学研究所）

珍しい留学先や研究分野で大学院留学をされている日本人の方にスポットを当て、あまり世の中に出回っていない大学院留学に関する情報を発信する連載企画『院留学の本棚』のコーナー。第 7 回の今回は、シンガポールの大学院からイギリスの大学院に移られるというユニークな経歴で政治学を専攻されている上砂さんにご寄稿いただきました。

海外留学というと、多くの皆さんはアメリカやイギリスの「最先端」の大学院に進学して、修士号や博士号を取得するということをイメージされるだろう。学部時代の私もそのように平然とした「海外」の大学院への進学に憧れを頂いたわけだが、幸か不幸か紆余曲折を経て、これまで日本で修士号を取得したあと、ロンドン、シンガポールそしてケンブリッジと異なる国と都市での大学院生活を経験してきた。さらに言えば、専門が東南アジア政治ということもあり、これまで東ティモールとインドネシアで合計 2 年近くの研究滞在を経験してきた。イギリスで東南アジア政治をやっている日本人という、かなり奇妙なバックグラウンドから今回このように記事を書く機会を頂くことになった。

■ コーネル学派「巡礼の旅」

そもそも私が初めて海外学位留学を経験したのは、2019 年にイギリスの London School of Economics and Political Science (LSE) の政治学部の修士課程に進学したときだった。これも変な話で当時はオーストラリアの博士課程に進学しようと思っていて奨学金の準備もしていたわけだが、最終的にどうもオーストラリアの先生とアプローチが違うことがわかり、ダメもとで出していた LSE から修士課程の入学を許可され、奨学金が先に決まっていたので進学したというあまり参考にならない留学の動機だった。なぜ LSE の政治学部にしたかというと、そこに兼ねてから指導を仰ぎたかったジョン・サイデル教授 (比較政治、東南アジア研究) がいたからに他ならない。1980 年代に 20 世紀の社会科学に最も影響を与えた本の一つである『想像の共同体』が Cornell 大学のベネディクト・アンダーソンによって出版されたのだが、サイデルはまさにこのアンダーソンの弟子だった。大阪大学大学院在学中に私は東ティモール独立紛争のナショナリズムを研究するために半年間東ティモールとインドネシアでフィールドワークをしていたこともあり、アンダーソンはもちろんサイデルの作品の多くに触れてきた。単なる東南アジア政治の情勢分析研究ではなく、そこからより理論的な枠組みを作り出してきた彼らの研究に強い刺激を受けたわけである。

LSE での 1 年間はあっという間だったが、コースワークは厳しくも充実しており、サイデル教授とも何度か深い議論がする機会を持つことができた。そして何よりその後イギリスに帰ってくる理由の一つにもなった多くの友人ができた。在学中に東南アジア研究のトップジャーナルから論文を出版する等、研究成果も少しずつ世の中に認められるようになった。当時コースワークをやりながら並行して博士課程への出願を準備してきたわけであるが、博士課程への出願は一筋縄には行かなかった。LSE とケンブリッジの博士課程に応募するも不合格。一方でシンガポール国立大学 (NUS) は業績を高く評価してくれ、新設された Comparative Asian Studies programme の博士課程にフェローシップ付きでオファーを頂くことができた。東南アジアのことをやっている以上はシンガポールで博士課程をすることは決して悪い選択肢ではない上に、奨学金付きだったので、そのまま NUS で博士課程に進学した。NUS での指導教員は、インドネシア政治の専門家ダグラス・ケイメンである。彼は、コーネルでのアンダーソンの弟子で、LSE のサイデル教授の古い友人でもあった。なかなか気難しい人ではあったが、(LSE とは違って) 指導はかなり丁寧にしてくれ、課題の量もかなり多かったが彼のおかげで研究者としての基礎を養うことができた。こうして私は、東南アジア研究の「コーネル学派」人たちからなぜか米国の外でトレーニングされるという経験をしたわけである。

それ以外にも NUS での研究はコロナ下ではあったもののそれなりに充実していた。米国の博士課程に倣い 2

年間はみっちりコースワークをすることになっているのだが、履修者の数も欧米の修士プログラムと違ってかなり少ない上に、1つの授業が大体2時間半くらいあるので、LSEでのコースワークとは比較にならないほどエンゲージメントを求められたし課題も多かった。また、ダグラスの計らいで、当時プリンストン大学で政治学博士を取得してYale-NUS Collageに新しく助教授として採用されたスティーブ・モンローが国際政治経済学(IPE)のチュートリアルをマンツーマンでやってくれることになった。これはせっかくなら米国の一流大学の政治学博士から先端の議論や手法を学んだ方が良いというダグラスの計らいだった。手法も対象地域も全く違う教員ではあったが、そのおかげで地域研究を超えたIPEの理論や実証研究におけるアプローチ等多くを学ぶことができた。これは世界のトップ大学を出た若手研究者を高待遇で引き抜いてくるのがうまいNUSならでは機会であったと思う。

■ コーネル学派「巡礼の旅」

そうこうしているうちに、NUSでのコースワークを始めてから一年半が経とうとしていた。NUSでの教育には大変満足していたが、いざ博士論文の準備をし始めてみるとどうもしっくりこない環境があった。ご存知の通り、シンガポールは事実上一党独裁の国であり、民主主義ではない。大学内の規律も厳しく、キャンパス内でのアルコールは厳禁だし、結社の自由もない。大学の教育も制度化された競争原理が確立されており、学生も教員もそれにしたがって常に競争を迫られる環境だった。ロンドンでの生活ですっかりリベラリズムに甘やかされた私にとって、シンガポールでの生活はどこか窮屈だった。また多くの学生が東南アジアや南アジアから来ており、彼ら彼女たちは自国の研究をしている人が大半というところにもどこか議論の幅の狭さを感じることがあった。この人たちの多くはすでに自国の大学でテニュア（終身雇用資格）を取っている人たちも多く、NUSには博士号の取得を主目的に来たという感じなので、例えば査読論文の話や博士の後のキャリアの話をするにも、どうもしっくりこないことが多かったわけである。

同時に、博士号取得後のキャリアにも不安があった。確かにNUSは世界有数のトップスクールであり、東南アジア研究でも屈指の研究機関である。しかし、社会科学の教員ポストの採用というのはかなり「どこの地域で博士号を取得したか」が重要になることが多い。例えば、米国の大学院のテニュアポストは基本的に米国で博士号を取得した人が就くことが多い、仮にオックスフォードやケンブリッジで博士号をとったとしても博士号取得後の若手が米国でテニュアを狙うのはかなり難しい。シンガポールの場合どこで就職先を探すかという点で懸念が残った。まず、外国人である自分は、NUSで博士号をとった場合、そのままNUSで教職に就くのはほぼ不可能である(NUSのテニュアは基本的に欧米のトップ大学の博士号取得者が大半)。また日本人である自分がそこからヨーロッパのアカデミアの市場に入り込めるかというとかなり怪しい。そうなると結局選択肢は、日本でテニュアを取るか中国や香港の大学を狙うかに限られる。ただ政治学という分野上、中国や香港での研究活動はかなり制限される可能性があり、日本に帰りたいかというと帰りたくはなかった。

そんな中、前回不合格となったケンブリッジ大学の政治国際学部の開発学研究所に新たに米国のノースウェスタン大学政治学部から中国とインドネシア政治を専門にするウィリアム・ハースト教授が移動してきた。ノースウェスタン大学は、政治学の質的研究のメッカで、ここの研究者の論文は私もたくさん読んできた。イギリスの博士課程は3～4年であり、ケンブリッジの場合コースワークはなく淡々と研究をして博士論文を執筆するだけ。仮にNUSに残ってもあと3年はかかることを考えると、この際ケンブリッジに移って博論を書くにもありではないかという考えが浮かんだ。仮にケンブリッジで博士号を取ったとすると、就職の面では出せるところが格段に増える。とはいえ合格する確率は極めて低いので、指導教員には内緒で出願の準備を進め、推薦状はLSEのサイデル教授とYale-NUSのスティーブに書いてもらった。結果、PhD in Politics and International StudiesとPhD in Development Studiesに出願、前者は不合格だったが、後者からハースト教授の指導の下で博士課程をやるということでオファーを頂くことができた。

留学費用をどう工面するかという問題もあったので、その辺りをある程度肩をつけた後、ケンブリッジからオファーをもらったことをNUSの指導教員のダグラスに伝えると、彼は“PhD from Cambridge is better than PhD from NUS”と言って、ケンブリッジの指導教員とうまくやっていけるならという条件で、ケンブリッジ行きを勧めてくれた。これは割とアメリカ人の学者の典型的な反応だということがわかった。とはいえ、自分自身もNUSで多くの先生たちにお世話になったし、彼らが植民地主義的な知的生産に対抗してNUSを中心にアジアにおけるアジア研究を推進していることもよく知っていた。そのため、東南アジア植民地支配の根源のようなケンブリッジに行くというのは、そのスクールの違いからアジア研究者にとってかなり抵抗があることがある。これは特段アジア研究をしているアジア人にとってはかなりセンシティブな問題となる場合もある。

■ ケンブリッジでの研究生活

ただ結果的に、私は full-fund の NUS での博士課程を中退して、ケンブリッジ大学に入り直すことにした。それは、身も蓋もないがやはりパブで飲みながら論文を書くのが自分の中で一番効率が良かったことと、博士号取得後のキャリアの多様性だった。実際にケンブリッジに来てみて、やはり論文を書く環境としては最高だった。毎日様々なテーマでセミナーが開催されていて、自由に参加できるし、来ている学生の国籍もより多様で自分の議論の枠もとても広がった。ここではケンブリッジ大学のジャッジビジネススクールで TA として「新興国の科学技術政策」のセミナーを担当し、アジアやアフリカから留学に来ていた官僚やビジネスエリートたちの学生たちとたくさん議論することができたし、何よりビジネススクールで教えたという経歴は自分のキャリアにとってもプラスになった。

ケンブリッジ大学でカンファレンスの受付を行う筆者

一方で、ケンブリッジの教育はその知名度とは裏腹に、必ずしも評価に値するものではなかった。そもそも博士課程は必須の授業は研究手法のセミナー 1 つだけであり、それもとても研究手法を教える授業ではなくて単にみんなで議論するという程度でほぼ学びはない。修士課程の授業もいくつか覗いたが、セミナーは僕の先輩や同期にあたる博士課程の学生が担当しており、ポスドクやテニュアの教員がセミナーも担当する LSE や NUS と比べるとそのクオリティはかなりまちまちであった。ケンブリッジ大学は学部生に対してはカレッジでみっちり指導するのだが、修士課程以上の教育になるとかなりお粗末になる。とはいえ、ケンブリッジに修士課程で来る学生たちは大変優秀な人たちなので、みんなそれなりに成果を出して修了していくわけだが、払っている授業料とそこで得た学びを比べると割に合っているとはあまり思えない。

もう一つ残念だったのは、Cambridge School of Southeast Asian History と称される程、ケンブリッジ大学はかつて東南アジア研究の重要な拠点だったし、今でもそれなりに著名な先生たちが在籍しているのだが、大学全体として、東南アジア研究に対する関心はかなり低いことがわかった。学生の大半は、ヨーロッパ政治や国際関係史、政治理論をやっている人たちで、シンガポールから来た私からすると、どことなくとてもコロニアルな雰囲気だった。これはまぁ大英帝国時代に植民地行政官を養成してきた大学だから仕方ないといえば仕方ないのだが . . .。

とはいえ、すでに自分の中にいくつか面白いアイデアがあり、それをいろんな人たちと議論して知的好奇心を満たす場としては、ケンブリッジは最高の場所である。その意味で僕にとって、NUS で 2 年間みっちり修行してからケンブリッジに来たことは、遠回りをしたものの逆に良かったと思っている。

所属するケンブリッジ大学クイーンズ・カレッジの外観

■ おわりに

このように、アジアとイギリスを行ったり来たりしているわけだが、この記事を書いているこの瞬間はインドネシアに滞在している。2023 年の 10 月からフィールドワークのためにインドネシアに滞在して、現地でインタビューを行ったり、資料を収集したりしてきた。7 月にはフィールドワークを終え、日本を経由してイギリスに帰国する予定だ。学部生の頃に平然と考えていた海外留学とはある意味全く違う形で海外を彷徨う羽目になった。だが、紆余曲折あり、11 月からはロンドンの某シンクタンクで研究員をやることになった。振り返ると、「イギリスにいるけどなぜか東南アジアのことをよく知っている日本人」というこのバックグラウンドは欧米ではかなり希少だと思う。アジアとイギリスを転々としてきたこの経験は、研究

はもちろん仕事でも役に立つことは多い。特にイギリスは、多様性や異なる経験を評価する傾向にあり、シンガポールやインドネシアさらには東ティモールでの経験を高く評価してくれる人も多かった。彼らがみるアジアとは違った視点でアジアを見つめてきた自分の経験や研究は、欧米はもちろん日本のアカデミアやポリシーサークルでの議論をより多様なものする上で、重要であるということがわかってきたし、私のキャリアも今後、「イギリス―日本―東南アジア」という関係性の中で培われていくように思う。その意味で、「海外留学」や「海外就職」という時に、何も「一つの海外」に囚われる必要はなく、のらりくらりいくつかの拠点を転々とするというのも悪くない選択なのではないかと思う。

フィールドワークで訪れたインドネシア北マルク州テルナテにある某レストランのトイレからの絶景

特別企画
SoP 執筆支援プログラム座談会

昨年度の留学志望者・メンターにインタビュー

XPLANE では、『SoP 執筆支援プログラム』と題して、留学志望者に分野の近いメンターをマッチングして出願書類の 1 つである Statement of Purpose (SoP) の作成を個別支援する活動を 2020 年から毎年行っています（プログラムの詳細はこちらの記事より）。

今回は、プログラムの活動内容について詳しく知っていただくのを目的に、昨年度プログラムに参加された留学志望者のひろみさんと、そのメンターのお二人（メインメンターの金子さん、サブメンターの森山さん）に集まっていただき、座談会のような形で執筆支援を振り返っていただきました。進行役は、XPLANE の運営メンバーでもあり、今回の支援でサブメンターを務められた森山さんです。

＜参加者プロフィール＞
ひろみさん：日本で修士課程に在籍していた昨年度に執筆支援プログラムを利用し、今年からベルギーの KU Leuven の博士課程に進学。専門は化学（高分子）。
金子さん：アメリカの UC Santa Barbara 博士課程で、専門は化学（高分子）。執筆支援ではメインメンター。
森山さん：アメリカの University of Minnesota 博士課程で、専門は材料科学。執筆支援ではサブメンターで、今回の座談会の進行役。
（以下敬称略）

■ SoP プログラムを知ったきっかけ

森山：まずお二人に、XPLANE とこのプログラムを知ったきっかけを教えていただきたいです。
金子：僕は日本で修士の頃、海外留学しようって時に XPLANE っていうサイトを見つけて、この SoP 執筆支援制度を知ったんで参加させてもらって。その支援を受けた結果留学できたってことで、恩返し的な意味で手伝いたいなってことで今回はメンターとして参加させていただいたって感じですね。
ひろみ：私は XPLANE のことは学部 3 年生か 4 年生の時には知っていた記憶があるので、何をきっかけに知ったのかあんまり覚えてないんですけど、海外に行ってみたいって興味があって見てたんだと思います。
森山：SoP の支援のプログラムもあるのも、ウェブサイト上で知ってたという感じですかね？
ひろみ：Slack でお知らせいただいて知りました。Slack にはもう学部 4 年終わりとか修士の最初に入ってました。この間見てみたら自己紹介したのが 4 年生とかで、すごい前ですね。

■ 受験先をヨーロッパにした理由は？

森山：まずはひろみさん宛の質問からで、受験先はヨーロッパ中心で考えられていたと思うのですが、主な理由はなんでしょうか？
ひろみ：実は、身近にヨーロッパに近い人が多かったので、海外に進学しようと思う時に一番最初に出てくるのがヨーロッパだったというだけで、特段の理由はないんです。
森山：なるほど。身近な人というのは、学部とか修士の先輩とかですか？
ひろみ：いや、高校の時の友人がドイツに住んでいて、初めて海外に出たのがドイツだったんです。その後修士 1 年の時に初めて国際会議に出たのがフランスで、その後短期留学でフィンランドに 3 ヶ月行くことができて。自分の周りにある情報のリソースで言えばヨーロッパの人が多かった中で、学会で出会った人に「海外に出てみて、博士課程とかやってみたいんだけど」というのをずっと言っていたら、繋がった友達が色んな情報をくれたりして。**身近な情報にヨーロッパの情報がいっぱいあったので、踏み込みやすかった**かなと思います。
森山：意外ですね。私の印象だと、最近海外留学って聞くとだいたいアメリカかイギリスが出てくる人が多くて、リソースも多いというのがあるんですけど。アメリカ受験を考えたことはありましたか？
ひろみ：最初にフランスで国際会議に出た時にアメリカで研究者をされている方と知り合ったので、アメリカの選択肢もその時点ではあったと思います。だけど、どんどんヨーロッパの情報が集まっていくにつれて、その情報を持っていながらアメリカを選ぶ理由はあまりなかったですね。あとは、後に分かってきたこととして、ヨーロッパの博士はお給料が出ることが基本だし、きちんとした額がもらえるところが私の印象では多くて。それから日本で取った修士の学位をきちんと修士として認めてくれる。修士課程と博士課程が明確に分かれているところが多いので、私の修士を日本でやったという点が活かせるところかなと。[1]
森山：なるほど。せっかくなので金子さんの受験経緯も聞いても良いですか？

1　アメリカの博士課程の多くは 5 年一貫で、給料も一部は TA をすることに対して支払われることもある。一方、ヨーロッパの博士課程は、教授の持つ研究プロジェクト単位で博士課程学生を募集し、研究費から給料を支払う場合も多い。

金子：そうですね、アメリカが絶対良かったというわけではなかったのですが、学部時に半年ほどアメリカ東海岸に留学していて、**アメリカという国に結構慣れてたというのが今思い出すと大きい**かなと。逆にヨーロッパは一度もまだ行ったことないんですよね。そういう意味で、PhD で 3 年なり 5 年なり過ごすんだったらちょっと慣れているアメリカの方がいいかなって思って。あと、その時から高分子材料の合成と応用みたいな分野をやっていて、その分野で強そうなラボを探したら当時はアメリカの大学とかラボが引っかかることが多かったので。ヨーロッパの受験とアメリカ受験両方やるのは嫌だったので、アメリカ一本で出願した感じでしたね。

森山：2 つ違う受験システムをするのは嫌だと言うのは、私も確かにそんな感じだった気がします。

ひろみ：今話を聞いていて、私とは違うなって思ったこととしては、**私は英語圏がいいというこだわりがなかった、むしろ英語圏じゃない方がいいと思ってた**んですよね。それは実際に、フィンランドに住んでみて英語圏じゃなくても、みんな英語を話そうとしてくれるので大丈夫だと体感していました。英語圏のイギリスも見ていましたが、イギリスはお給料制じゃないところもあるし、外から来る学生に高い授業料をかけてお金を集めたりもしてるのでちょっと難しいなと。英語圏の国は自国の言語で研究できることが大きなアドバンテージだから、学生を獲得するときに大学が優位に立ち、私たちが不利になりやすい。私は研究が英語でできるだけでよかったし、生活の面でも言語で困らないという想定があったので、英語圏じゃなくてもいいっていうのがあったんだと思います。あとは、**みんなが英語を第二言語として喋る環境では、英語の苦手な私の気持ちを理解してもらえるので、とても暮らしやすい**なと感じています。

森山：なるほど、面白いですね。

ひろみさんが進学された KU Leuven の図書館

■ アメリカとヨーロッパの出願スケジュールの違い

森山：私がちょっと気になったのはスケジュール感で、一般にヨーロッパの方がアメリカより出願時期が遅いイメージがあります。この執筆支援プログラムはスタート時期が9月と早めで、ヨーロッパを受ける人にとってはどうでしたか？

ひろみ：ここは先にクリアにしたいと思うんですが、私はプロジェクトの博士学生公募に応募するという形をとったので、**正直出願を始める時期とか公募の時期とかに決まりがなく、通年の就職活動なのでどの時期が良い悪いはなかった**と思います。私は特に、出願が終わった後に空白ができることに抵抗がなく、いつ留学が始まったとしても良かったので、別にアメリカのスケジュールでも大丈夫でした。ただ、メンターのお二人がすごく私のペースに合わせていろいろ努力してくださったので、そのおかげで私もやりやすいようにできたかなと。私のいいタイミングでこのポジションがゲットできたかなと思います。

森山：私がアメリカで受験した時は、10 校とか 15 校とかたくさん出すというのもあって 12 月にかけてすごく忙しいイメージがあったんです。一方でひろみさんはプロジェクトベースで、良いのが見つかったらピンポイントに出すような形で。もちろん忙しいとは思うんですけど、スケジュール感が私の受験とはちょっと違ったなっていう印象がありました。金子さん的にはどうでしたか？

金子：そう思いますね。僕がアメリカ受験した時も主に 12 月の上旬が締め切りで、11 月末までに SoP や他の書類を全部仕上げなきゃいけないので、7 校とか 10 校とか受けると 11 月がめちゃくちゃ忙しくなる感じだった気がする。それと比べると、今回のひろみさんみたいにプロジェクトベースで期間が決まってない方が受験のしやすさ的にはしやすいのかもなと。

ひろみ：それぞれのプロジェクトベースの博士学生の公募にも期限はあるのですが、公募は年中出てくるので通年になり得るんです。アメリカみたいに「大体どの大学もここのあたり」という期限が決まってないので。私はすごくラッキーで初めて応募したところからすぐに内定をもらってそこに決めたけど、**長期戦にもなり得るというのはヨーロッパ受験のすごく難しいところ**です。

金子：執筆支援の観点から見ると、今回我々どっちもアメリカ受験組だったのもあって、ヨーロッパ受験の場合はメンティー側の人がスケジュール感を教えてくれないとメンター側もちょっと分からなかったかも。今回はひろみさんがうまくリードして情報を伝えてくれていたので、そういう問題が少なかったなと思います。

■ Generating ideas/Organizing ideas の重要性

ひろみ：もう 1 つアメリカの話と違うなと思っているのは、アメリカは「自分がどういう研究をしたいかが自分の中であって、その周りを見ていく」という情報の探し方が多いと思うのですが、私はどちらかというとより受け身な探し方でした。なんとなく「自分はこういうのやりたい」という考えはあるけど、どういう研究をしたいかまでは進んでいなくて。プロジェクトごとの募集で「どういう仕事の内容があるよ」というのを言ってもらえて、そのうちどれに自分がマッチしてるかを探すというヨーロッパ式が楽だったというか、私には合ってたのかもしれないなと思います。

森山：なるほど。それを聞いて思ったんですが、SoP でも型は使えるけれど、アメリカとヨーロッパの大学向けで指向が違うというか。プロジェクトベースだったりする中で、XPLANE で載ってる一般のリソースとも少し違うストラテジーが必要ですよね。

金子：やっぱり**アメリカの SoP は「大学の学科に申し込む形の受験」**ですよね。自分の経験をつらつら述べて、何個か希望のラボを上げて「自分にマッチしてます」みたいな。「最終的にこういうキャリアを築くために、ここで勉強するのが一番いい」といったテンプレートのようなものが何となくあるじゃないですか。自分のキャリアを積んでいくための一段階としての教育的な部分を結構重視するという感じがするんです。一方ヨーロッパの博士はプロジェクトごとに人を募集して、求められている能力や経験もそこで決まっているという印象があって。だから **SoP でも、プロジェクトの requirement に自分がマッチしてるというのをちゃんと書く必要がある**と思うんですよね。SoP 書くって点に関してアメリカ受験とヨーロッパ受験でそこは結構違うところかなと思いました。

ひろみ：私としては、「SoP を実際書く」という段階の文章の構成とか、何の内容をどう書くかとかそういうことは違うと思うけど、大枠として「なぜ PhD をやりたいか」とか「どうしてこの分野を選んだか」とかの部分の考えを固めていくことは一緒だと思います。SoP プログラムの 1 回目や 2 回目のミーティングで金子さんとお話しさせてもらって、その考えを固めていく段階を手伝ってもらえたのがすごくよかったし、それはアメリカでもヨーロッパでも何も変わらないのかなとは思いました。本当に PhD やりたいのか、なぜやりたいのかっていう点が自分で考えるだけでは曖昧だった自覚があったのですが、それを人と話す中で、文章に落とす中で自分のことを理解していくこともできたのがすごく良かったなと思います。

森山：なるほど、最初のミーティングとかで「なぜこういうことをやりたいのか」っていう指針を明確化できた点では支援が上手くいったっていう感じですかね。

ひろみ：すごくありがたかったです。例えば金子さんが「SoP プログラムで配ってもらった教材を一通り埋めてみるのはどうか」と言ってくださって。それを一通り埋めてみたら、あまり自分でもパッとしない感じだったのですが、「そこをもう少し詳しく変えていったらいいんじゃないか」とか「自分に合った、私だけの考え方は何なのか見極めたいんじゃないか」と言ってくださって。それが自分のやりたいことを考えるのにすごく役に立ったので、良かったなと思います。

金子：それは何ていうか、ありがとうございます。確かに SoP 支援の教材パッケージの中に「アイディアを考える (Generating ideas)」みたいなドキュメントがあって、それを活用した感じでしたね。確か、初回にいくつか埋めてもらって。やっぱり良い SoP やエッセイは、「他の人が書けない、テンプレ感がない」のがやっぱりいいのかなと思うので、ひろみさんらしさというか、その人の個性が見えるように、目標とかに具体的な要素を入れていくといいんじゃないかなっていうのは言ったかもしれないですね。

Part 3: Worksheet

Worksheet：SOPに書く要素に対応した質問リストです。以下の質問に対する回答を考え，記入してみましょう。

※[　]：オプショナル。書くように指定されることもある。

Introduction

【長期的目標】

- 自分の長期的な目標（少し壮大な学術的あるいは社会的貢献の目標）は？
- [その長期的な目標を抱くに至った経緯は？]
- その長期的な目標を叶えるため，なぜ大学院に進学する必要があるのか？

SoP プログラム提供の Generating ideas 過程向けの教材（抜粋）

ひろみ：あと、最初に金子さんがどの部分に時間を割きたいかっていうタイムマネジメントのことを聞いてくださったんですよね。その時点で私はまず受験をしたいかどうかっていう所から曖昧な自覚があったから、自分の考えをまとめる最初の部分に時間をかけたいという自分の意思を伝えて、そこに時間をかけたというのもありますね。

金子：メンターとしては、自分がアメリカの方の経験だけだったので最初は想定と違う感じで戸惑いましたが、ひろみさんがいろいろ情報を共有して「こういう支援をしてほしい」という形を結構やりやすくしてくれてたので、

そういう意味ではありがたかったかなと思います。

■ マッチングとサブメンター制度について

森山：SoP プログラム運営からもらっている質問で、メンターと志望者をマッチングする際には「基本的に分野ベースで選んで、次に留学希望地域」という風にしてるのですが、今後のマッチングの参考にもなるので留学志望者側とメンターする側でやりやすさ、やりにくさがあるか聞いてみたいそうです。

ひろみ：私個人としては研究分野で分けてもらってすごくありがたかったなと思っています。やっぱり、**私がSoP で書いている内容をもっとこうした方がいいと突っ込んで言ってもらえることって、他の違う分野の人たちになるとない**と思うんです。 私は今までの留学先とか学会で知り合った人から「どういう風に受験が進んでいって」と「ここの国はどうで」とか一般的な情報が入ってくるリソースが他にあったので、私にとってはSoP の支援の中では分野で分けてもらってよかったなと思います。

金子：マッチング方針はこれでいいと思います。まず分野、次に地域で。

森山：分野が全然違うと理解するのにかなりの労力が必要なので、違う分野でも多少近い方がバリアが低くなるって点でやりやすいのかなとは思います。
ちなみに、サブメンター制度は受ける側からはどう思いました？

ひろみ：2 人いてよかったことは、違う視点で意見がもらえることです。一般化しすぎかもしれないけど、違う視点で意見がもらえるので意見の数が単純に増えるんです。ただ、意見が増える分その conflict も増えちゃうというのはあって、「これはいいと思う」「悪いと思う」というこだわりがあまり自分に強くない人は困る部分はあるかもなとは思いますね。ただ、2 人から同じことを言われたら「それは確かにそうなのかも」と信頼は持てます。

森山：出願した後に教授から面談やインタビューがあった時、「私はこんな感じで準備した」などと一応自分の時を思い返して助言したと思いますが、これは助けになりましたか？出願体系が若干違う中で、私たちのアドバイスは参考になったかをお聞きしたいです。

ひろみ：一般的過ぎるかもしれないですが、**基本教授が学生に求めていることって大体一緒だと思う**ので、準備などが特段違うとは思わなかったです。プロジェクトベースでスキルを求められているとしても、教授は研究スキルとかにそんなに高いレベルを求めているわけじゃないので。例えば実際にあったのは、「高分子合成をやらせることになると思うけどそれは大丈夫？」って聞かれた時に、私は「正直何も知らないけど大丈夫か」って聞いたんです。すると向こうは「全部 Willingness to Learn で解決することだから何も知らないことは問題なくて、そこにパッションがちゃんとあるかどうか」って言われました。今まで話してきた先生も、ヨーロッパの先生ばかりですけど、みんなそうだなと思いました。

森山：なるほど、ありがとうございます。

■ これから出願する人、SoP プログラムに参加する人へのメッセージ

森山：あとは、これから出願する人や、プログラムに参加される方へのアドバイスで締めくくろうと思います。金子さんどうですか？

金子：**いろいろ体制が整ってきてると思うので、留学に興味ある人は思い切って海外の大学院を目指すのも良いタイミング**だと思います。SoP のメンターの方には、「メンティーに親身に寄り添ってください、研究との両立はスケジュール管理をしっかりと」という感じですかね。

森山：大事です。ありがとうございます。ひろみさんも、受験全般でも、SOP 参加する志望者へのアドバイスでもいいのでお願いします。

ひろみ：全体では、**急ぐことはないし、遅いことはないからいつでも受験したいと思ったら受験すればいいし、受験しなきゃダメなわけじゃない**と思います。「受験したい」と思った時にすればいいかなっていう印象があります。SoP を書くことで言えば、**私はメンターの方と一緒に、なぜ博士課程をやりたいのか、何をやりたいのかという基本的な考えをまとめることに時間を使いました。その後書き始めるとわりと早く書き終えることができたので、添削の時もこねくり回して全部変えてもらう必要がなかった**です。**自分がちゃんとした考えを持っていて、自分の方向性が分かっている状態で書き始めることが大事だった**と思います。

森山：本当にそうだと思います。出てきた最初のドラフトがかなり仕上がってたイメージがあったので、本当に最初の方のミーティングのアイディア固めが上手く行ったんだなと思いました。素敵なアドバイスだと思います。

ひろみ：ありがとうございます。私は本当にこの制度がなかったら受験自体が成功しているか分からないし、金子さんと森山さんがいっぱいアシストしてくださったので、本当にありがとうございました。

金子：メンター冥利に尽きますね。ありがとうございます。

森山：ありがとうございます。

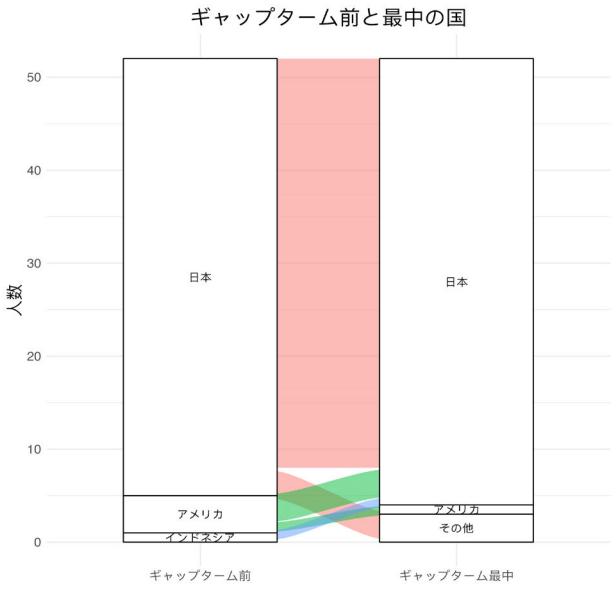
大学院留学生アンケート

ギャップタームの過ごし方

『大学院留学生アンケート』は、XPLANE Slack に在籍している海外大学院生に対してアンケートを行ったデータをもとに、大学院生かつや留学先での生活の実情を探るコーナーです。 今回のアンケートでは、アメリカから 23 名、イギリスから 8 名、スイスから 4 名、ドイツから 4 名、フィンランドから 2 名、ベルギーから 2 名、その他欧州の国々へ現在留学しているまたは進学予定の計 52 名からご回答をいただきました。回答してくださった皆様、ありがとうございました！

1. ギャップターム前に在籍していた大学 / 大学院の国

47 名の方が日本、4 名の方がアメリカ、1 名の方がインドネシアとの回答でした。予想通り、日本の大学 / 大学院に在籍されていた方が圧倒的多数でした。

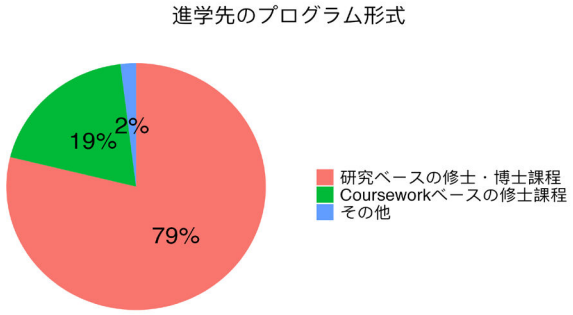


2. ギャップターム中に過ごした国

48 名の方が日本、1 名の方がアメリカ、3 名の方が日本とスイス（1 名）や日本とアメリカ（2 名）と言った２カ国で、ギャップタームを過ごしたようです。ギャップターム前に日本の大学に在籍していた方は、渡航直前まで日本で過ごされる方がほとんどのようです。海外の大学に在籍していた方も、日本に一時帰国をする方もいるようです。

3. 進学先のプログラム形式

7 割を超える 41 名の方が「研究ベースの修士・博士課程」に進学されており、10 名の方が「Coursework ベースの修士課程（例 .MBA、Law school）」、1 名の方が「その他（授業ベースの修士課程（研究は修士 2 年の最後半年だけ）」との回答でした。



4. ギャップターム中の過ごし方

回答してくださった方々のギャップターム中の具体的な過ごし方を要素ごとにまとめました。進学先のプログラム形式の約 8 割が「研究ベースの博士・修士課程」だったため、最も多い回答は「学部 / 修士で所属していたのと同じ研究室で研究」でした。また、「研究以外のアルバイト / フリーランス」や「学部 / 修士で所属していたのと別の研究室で研究」をして夏の間を過ごした方も多かったようです。

活動内容	人数
学部/修士で所属していたのと同じ研究室で研究	21
研究以外のアルバイト/フリーランス	13
学部/修士で所属していたのと別の研究室で研究	10
企業でインターン	5
進学先の大学院で研究	5
休暇（実家に帰省、旅行など）	4
企業の勉強会に参加	1
夏の間に学部を卒業	1
自動車免許取得	1
現地での語学研修に参加	1
語学試験の勉強	1
論文執筆	1

5. 早めに（4 月～ 7 月）渡航して、進学先の大学院で研究を開始する場合の時期

ギャップターム中に「進学先の大学院で研究」と回答してくださった内の 3 名の方に渡航時期を尋ねたところ、4 月が 1 名、6 月上旬が 1 名、6 月中旬が 1 名でした。渡航時期は指導教員と相談したり、ビザ取得などの調整が間に合う一番早いタイミングで渡航されたようです。

6.「その他」の回答

最後に、ギャップタームの過ごし方のアンケート内で「その他」と選択された方の回答をいくつか抜粋して紹介させていただきます。カリキュラムなどに縛られないフレキシブルな期間であることを利用して複数の活動を並行して行ったり、留学後のためにエネルギーを蓄える充電期間として利用されることもあるようです。

- 基本的に無職。3 月に卒業し 6 月に進学という比較的短いギャップタームで、幸い家族が許してくれたので、時々単発のアルバイトをしながらも、実家でゆっくり過ごしました。学部から修士卒業まで実家から離れて一人暮らし、忙しく全てがストレートに過ぎ去ったので、「休む」という期間を設け家族と時間を共にしたことは、進学した後のエネルギーになっています。
- 4 ～ 7 月 : 日本で友達と会ったり旅行に行ったり最後の休みを満喫する & 渡航の準備をする。8 ～ 9 月 : 早めに渡航し (奨学金の benefit の一つである) 現地での語学研修に参加する。
- 学部 / 修士で所属していたのと同じ研究室で、修士（博士）課程の学生として研究を続けながら、ベンチャー企業でのインターンも並行でしていました。
- オンラインで進学先の人たちと共同研究しています。あと学部の頃のプロジェクトの論文化と、企業でのインターンと、ずっと取り損ねていた自動車免許の学校に行っています。

アンケートにご協力くださり、ありがとうございました。

XPLANE Topics

このコーナーでは、過去 3 ヶ月の XPLANE の活動についてまとめています。ホームページや Slack をぜひチェックしてみてください。

■ シリーズ記事企画『海外大学院受験記 2024』が開始！

海外大学院へ今年から進学する方々が最新の出願体験談を発信する恒例のシリーズ記事企画『**海外大学院受験記 2024』が今年も開始しました**！以下の 4 記事を現在までに公開しています。

- 『スイス留学：最先端の研究環境と充実した生活が両立する選択肢』（本橋さん , ETH Zurich）
- 『大学院で分野転向！～物理屋になりたかったんだもの～』（ふっかさん , MIT）
- 『もう後がない二度目の受験、徹底戦略で掴んだ米国博士課程への切符』（めんだこさん , Caltech）
- 『ミラクルな大学生が語るリアルな受験体験記』（SHION さん , UPenn）

■ XPLANE Podcast 新エピソード配信中

XPLANE の運営メンバーが様々なゲストを迎えながら留学や研究、他愛のないことを議論する毎週配信の Podcast チャンネルです。4 月～6 月は、以下のエピソードを公開しました。

過去のエピソード一覧はこのページから、Podcast のお便りも、こちらから募集しています。

Ep 56『留学ローカルトーク⑥：ドイツ編』

留学先ご当地トークシリーズの第 6 弾として、ドイツの 3 都市（ベルリン、ポツダム、ハイデルベルク）に留学中のゲストにお越しいただき、現地で驚いたことやローカルなあるある話、住んで良かったと思うことなど、現地の基本情報も押さえながら、存分にローカルなお話を繰り広げていただきます。(収録日：2024/3/10)

ローカルトークシリーズの他の回はこちらから

Ep 57『ティーブレイク～ 2024 春』

今回のティーブレイクではパーソナリティに加えて裏方担当（初登場！）による近況報告をお届けします！（収録日：2024/4/7）

Ep 58『医師留学』

日本で医師免許を取得したのちにアメリカに留学したゲスト 3 名の方をお迎えして、どのようにして留学を決断するにいたったのか、これからの展望などなどお話を伺っていきます。(収録日：2024/4/21)

Ep 59『海の向こうにサクラサク 2024』

2023 年から 2024 年にかけて海外大学院受験を経験したゲストによる最新の受験体験談をお伝えする企画。海外大学院受験を決意したきっかけから実際の受験にまつわる経験談について、全4回のエピソードでお届けします。(収録日：2024/5/26)

受験体験談シリーズの他の回はこちらから

■ X（旧 Twitter）で渡航準備情報を発信しています

今月から中の人が変わった XPLANE の X（旧 Twitter）で、「**# 留学準備これ気をつけろ**」というタグをつけて、過去に XPLANE で作った渡航ガイドの記事群の紹介などを中心に、渡航準備関連情報を発信しています。この秋から留学する方など、ぜひ準備にお役立てください。

■ 大学院進学者交流会　今年も開催決定！

恒例のオフライン・オンラインで開催している進学者交流会、今年も 7 月に開催が決定しました！詳細は Slack の #group-2024enroll チャンネルをご覧ください。

■ XPLANE SoP 執筆支援プログラムの募集が近日開始します

今回の特別企画のテーマの SoP 執筆支援プログラムですが、今年も開催が決定しました。説明会や募集が 7 月に始まりますので、参加を希望される方は Slack の # 運営からのお知らせ チャンネルをチェックしておいてください。

XPLANE Back Number

■ 渡航準備特集

いざ海外大学院進学が決まると、次にやるのは予防接種や海外送金など多数の手続きです。XPLANE ホームページでは、これらの渡航準備・渡航後の生活立ち上げに関するガイドを項目別に公開しています。

- **XPLANE 渡航ガイド**
- **渡航準備チェックリスト**

留学記事を募集中！

編集部では、こちらのニュースレター『XPLANE TIMES』に掲載する記事を執筆していただける方を募集しています。現在､海外大学院生の大学生活と研究生活に焦点を当てた『**院留学の本棚**』、大学内に限らず、生活や地域、趣味など、留学生活を幅広く扱う『**留学生活だより**』の 2 つのコーナーへのご寄稿を主に受け付けております。ただし、この 2 つの連載に限らず、ご寄稿のアイデアがある方は遠慮なくご連絡ください。

記事のご寄稿にご興味を持たれた方は、**こちらの Google フォーム**または **xplane.contact@gmail.com** へのメールにてご連絡ください。皆様の留学記事をお待ちしています。

XPLANE TIMES
第 4 号
発行日：2024 年 7 月 7 日
発行：海外大学院支援コミュニティ XPLANE https://xplane.jp
編集部：松尾 仁嗣、大野 康晴、森山 彩佳、中原 理沙、鈴木 世莉奈、大山 主朗、川手里桜、相原豪太、前田拓哉、田主陽